



明治維新150年特集

吉嗣拜山と明治維新

吉嗣よしつぐ拜山はいざんは、幕末から大正期を生き太宰府出身の漢詩人、文人画家ですが、明治維新と拜山との関わりについて、いくつかの史料からうかがってみましょう。

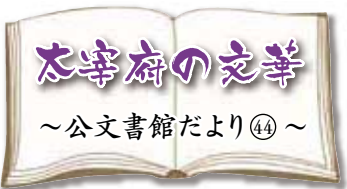
拜山は、元治げんじ元(1864)年、19歳で日田の私塾咸宜園かんぎえんに入門しました。しかし、慶応2(1866)年、第二次長州征伐に際して小倉城が落城すると、敗兵が逃げ落ちてきた日田も大混乱となり、拜山はやむなく太宰府へともどつてきます。

同3年春、京都に上り南画ななびが家中西耕石なかにしこうせきの門を叩き画道に志しますが、翌年(慶応4年・明治元年)、明治維新を迎えて京都も騒然となり、一方で明治政府が書生の採用を始めたことから、耕石のもとを辞して、倉敷県書記局に奉職し、官吏となりました。拜山の明治元年の日記、十月五日の項には、明治新政府と旧幕府勢力、奥羽越列藩同盟の間起こった戊辰戦争のうちの東北戦争に関する記述がみえており、同席した者は、官吏として新政府軍勝利の報に思わず快哉かさいを叫んだと記しています。

明治11(1878)年、拜山が清国(中国)を来訪し、その名所旧跡を訪ね、文人たちと交流をもったことについてはすでにふれたことがあります(『年報

太宰府学』10号)。この時に記された

清国の人びととの「筆談録」にも明治維新にかかわる記述があります。たとえば、日本における官吏登用法について尋ねられて「戊辰(明治元年)以来、大政一変、時に改革ありて、考試の法、未だ確定せず」と答えています。別の箇所でも、どのようにして官吏となったのかを問われ、「弟(拜山が自らを謙遜した自称)、固より才なし、徳なし、芸なし、最も門地裔もんちのちえにあらず。只、人の成事に因りて驥尾きびに附すのみ」また「我が邦、十年前に覇政、今、王政に属す。較挙人等の道、始めて開かれ、いまだ完全ならざるなり」と、明治新政府の官制の未整備に言及しています。これらは、拜山の前歴を知った清国の文人たちが、自らの国と比較するため、日本の実情を尋ねたものでしょう。



こうしてみると、拜山にとつての明治維新は、画道を捨てて官吏となるといふ、人生のひとつの転機だったと思われまふ。拜山は、その後も東京に転職となり官吏を続けますが、明治4(1871)年、不慮の事故により右手を失い、以降、官吏としての立身出世を諦め、隻腕せきわんの文人墨客として生きる道を志すこととなるのです。

太宰府市公文書館 重松 敏彦